

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ヨモギ *Artemisia princeps* Pampanini
(= *A. indica* Willd. var. *maximowiczii* (Nakai) H. Hara)
(キク科 Compositae APG 体系: Asteraceae)

連絡先: 城西大学薬学部
shiratak@josai.ac.jp

夏が過ぎ、ひつじ雲（高積雲）がたなびく頃、散歩しながら道端に目をやると、ヨモギが茂っています。ヨモギといわれる植物にはいろいろな種類があり、とても紛らわしいので他のヨモギと区別するためカズザキヨモギともいいます。ヨモギは本州以南の日本ならびに、中国、朝鮮半島の山野に自生する多年草で、日当たりのよい原野や道端などに生え、初秋に花をつけます。花は風媒花のため地味で目立ちませんが、若芽は食用になり、草餅に入れられ、お灸に使われるもぐさの原料にもなる薬草です。名前の由来には、諸説ありますが、よく繁殖し四方に広がるので「四方草」、春によく萌えるので「善萌草」、また、よく燃えるので「善燃草」などです。別名としては、春に若芽を摘んで餅に入れることからモチグサ（餅草）、葉の裏の毛を集めて灸に用いることからヤイトグサ（灸草）といえます。花期は、9～10月、円錐形の複総状花序に管状花のみからなる淡黄色の頭花を多数つけます。頭花は長さ約3mm、中心部に両性花、周りに雌花が咲き、どちらも結実します。茎は叢生し縮毛があり、葉は互生、楕円形で長さ6～12cm、羽状で中～深裂し、裂片は2～4対で長楕円状披針形、葉柄基部に仮托葉（小葉片）という小さな葉があります。ヨモギは春、まだ寒い早春のうちから、他の植物に先駆けて白銀色の産毛をまとったロゼット状の若芽を出し、生長をはじめ、草丈は50～100cmほどになり、葉の裏面は白い綿毛（毛茸と腺毛）を密生して白っぽく見えます。顕微鏡で見ると、毛茸の1本が途中から2つに分かれてTの字に似た構造になっていることから「T字毛」とよばれ、根元から生える毛の数を多くしています。さらに毛は蠟を含んでいて、水分を逃がさないしくみになっています。ヨモギと同じキク科植物の多くは、植物進化の過程で風媒花から虫媒花へ進化したのですが、ヨモギ



写真1 ヨモギ（花）



写真2 ヨモギ（新芽）



写真3 ヨモギ (茹でたもの)



写真4 草餅



写真5 ヨモギ (6月頃の収穫時)



写真6 もぐさ (点灸艾)

は虫媒花をやめて再び風媒花に転換した植物なのです。そのため、他のキク科植物のような目立った花びらもなく地味で、風を頼りに大量の花粉を飛ばします。また、セイタカアワダチソウと同様に地下茎などから他の植物の発芽を抑制する物質を分泌します。この現象をアレロパシー *allelopathy* (他感作用) といいます。

乾燥したヨモギ、またはオオヨモギ *A. montana* の葉および枝先をガイヨウ (艾葉 *Artemisiae Folium*) といい、漢方では胃腸は丈夫ですが、痔出血、下血、性器出血、腎・尿路出血などがあり、ときに出血による貧血や眩暈 (めまい)、顔面蒼白、四肢の冷えや脱力感を伴うとき、女性では、過多月経や不正性器出血などが起きたときに使用される芍薬膠艾湯に配剤されます。また、民間では、腹痛、下痢、貧血、冷え性などに効果があるとして止血、歯痛、健胃などを期待した多くの民間療法に利用されます。葉の成分としては精油の 1, 8- cineole, (–)- α -thujone など、ケイヒ酸類誘導体の chlorogenic acid, フラボノイドの eupatilin, jaceosidin, クマリンの umbelliferone, scopoletin, 脂肪酸の palmitic acid, oleic acid, linoleic acid, その他 vitamin A, vitamin B₁, vitamin B₂ などが報告されています。

食用には、早春につんだ新芽を茹で、おひたしや汁物の具、天ぷらにするほか、餅に入れて草餅や草団子にして食べられます。ヨモギを入れるのには、単に色や香りをつけるだけでなく、増量による型崩れを防ぐ「つなぎ」としてもヨモギが適しているためと考えられます。灸に使うもぐさ (艾) は、6～8月頃、生長したヨモギの葉を日干しして乾燥させ、白でついてふるいにかけて、裏側の綿毛だけを採取したものです。また、ヨモギは食用や薬用だけでなく、戦国時代、馬の尿をヨモギの根にかけ硝酸を生成し火薬の原料にしたという話もあります。ヨモギの仲間は、古今東西、魔よけの効果があるとして人々に利用されてきました。子供

の頃、私の生地（但馬地方）では、5月5日の子供の日にショウブとヨモギと一緒にワラで縛り屋根に放り投げたことを覚えています。たぶん、邪気を払ったのでしょう。これは、中国の風習「端午の節句」に始まり、今も正倉院に保存されている「百索^{ひやくさく}縷^る軸^{のじく}」がありますが、「薬玉^{くすだま}」を作り、飾って健康増進を図った習わしなどとも関係しているものと思われます。

オオヨモギ（ヤマヨモギ）は、近畿以北、北海道の山地に自生し、生薬ガイヨウ（艾葉）の基原植物の一種で、ヨモギより大型でヨモギには葉柄基部に仮托葉という小さな葉がありますが、オオヨモギにはありません。ニシヨモギ *A. indica* Willd. var. *orientalis* は本州の西部以西、南西諸島に自生し、沖縄方言では「フーチバー」とよばれます。カワラヨモギ *A. capillaris* は本州から沖縄にかけて分布し、河原や海岸の砂地に自生し、草丈30～100cm、花がつかない茎は短く、ロゼット状に葉を広げ、花茎の葉は1～2回羽状に裂け、花期は9～10月、花茎を立てて卵形の頭花をつけます。乾燥した頭花（蕾）の生薬名をインチンコウ（茵陳蒿 *Artemisiae Capillaris Flos*）といい、利尿、利胆、解熱剤として黄疸、肝炎、食中毒、じんま疹、ネフロローゼなどに用い、主要成分としてクロモンの *capillarisin* を含みます。*A. cina* セメンシナ（シナヨモギ）は、中央アジアのトルキスタン地方、カザフスタン地方南部に自生し、頭花（蕾）を乾燥したものが生薬のシナカ（シナ花 *Cinae Flos*）で、回虫駆除作用のあるサントニン α -santonin を含みます。サントニンを含有するヨモギ属植物にはヨーロッパ原産のミブヨモギ *A. maritima* L. subsp. *monogyna*、パキスタン原産のクラムヨモギ *A. kurramensis* などがあります。クソニンジン（黄花蒿）*A. annua* は、温帯アジア原産で屠^と叻^う叻^うによりキニーネ *quinine* やクロロキン *chloroquine* に代わる新しい抗マラリア薬アルテミシニン (*artemisinin*,



写真7 生薬：ガイヨウ（艾葉）



写真8 ミブヨモギ *A. maritima* L. subsp. *monogyna*



写真9 クラムヨモギ *A. kurramensis*



写真10 クソニンジン（黄花蒿）*A. annua*

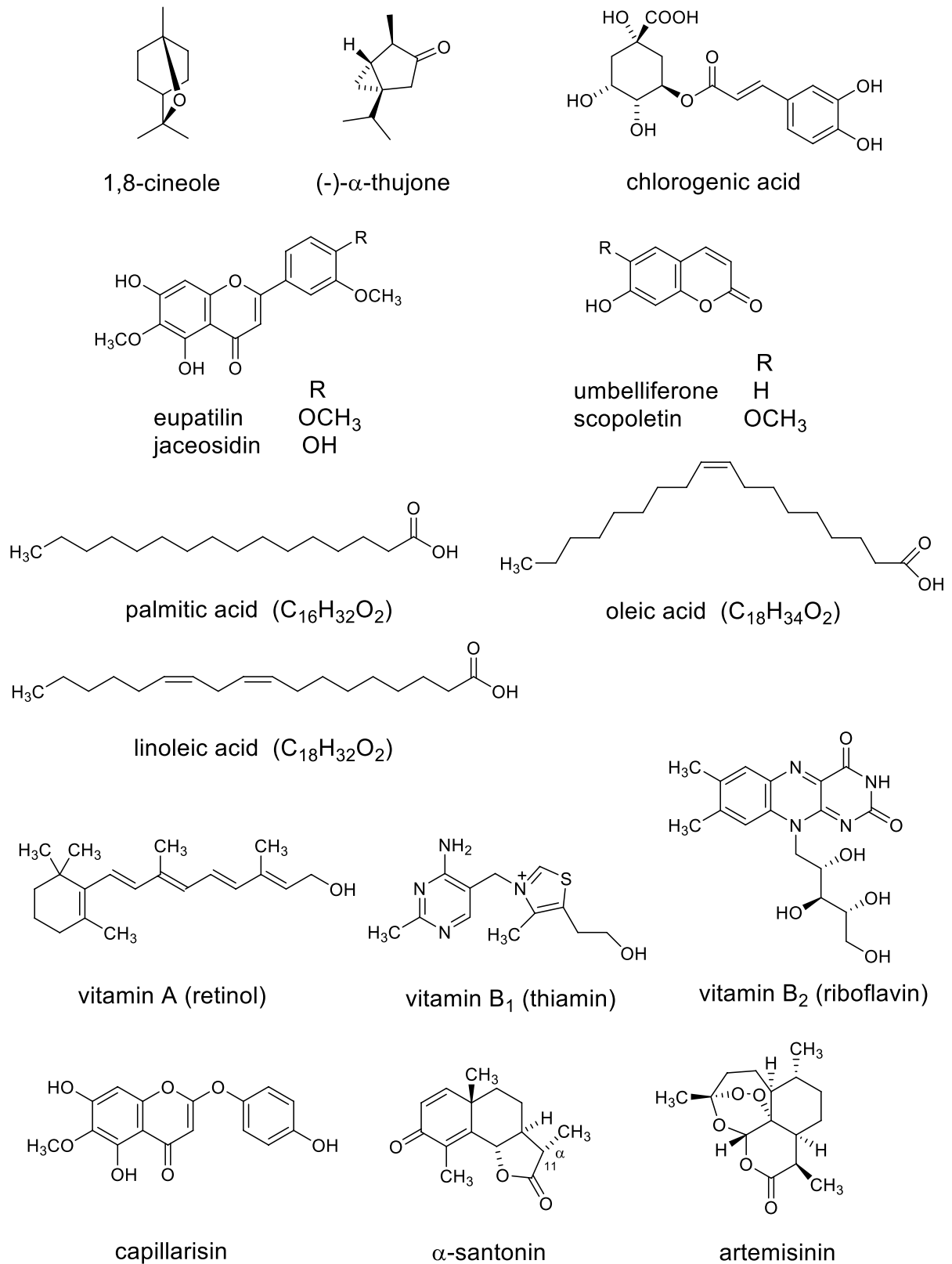


図1 成分の構造式



写真 11 トリカブトの仲間



写真 12 抗マラリア薬アルテミスニン

チンハオス qinghaosu, 漢字: 青蒿素) が単離され, 発見者の屠は, 2015 年, 抗寄生虫薬イベルメクチン ivermectin の発見者である大村智, William C. Campbell らと共にノーベル生理学・医学賞を受賞しました。

『百人一首』(51 番) の^{ふじわらのさねかたあそん}藤原実方朝臣の歌

かくとだに えやはいぶきの さしも草 さしもしらじな 燃ゆる思ひを

訳: 「伊吹山のさしも草が燃えるように, 私の燃えるような思いが, それほどまでとは, あなたは知る由もないでしょう」

「さしも草」とはヨモギのことで, 漢字では「指燃草」と書きます。

また, ヨモギの葉と有毒植物のトリカブトの仲間は葉の形がよく似ているので要注意です。違いは, 1. ヨモギには特有の臭いがあるが, トリカブトの仲間には無い。2. ヨモギの葉の裏には白色の綿毛が生えているが, トリカブトの仲間には無い。3. ヨモギは日当たりの良い場所を好んで生えるが, トリカブトの仲間は日陰の湿った場所を好む。